

『おくのほそ道』再見

— 日光から白河まで — (その一)

横 山 邦 治

一

日光から白河まで、『おくのほそ道』におけるこの芭蕉の旅は、いよいよ「おくのほそ道」に足を踏み入れる前の緊張と、未知のものに対する憧憬と逡巡とに満ちたものではなかったか。その芭蕉の旅の足跡をたどってみようとの企画を、広島文教女子大学文学部国文学科三年次生の諸君が樹てた。私もその驥尾に付して足手まといながらお供をした。そのささやかな旅の、これは報告である。

二

昭和六十二年八月三十一日(月曜日)、台風襲来の余波の強風吹き荒れる早朝(私は、タクシーに乗って饒津神社横

を走っている時、神社の大木の枝が折れて倒れかかり、一瞬どうなることかと肝をつぶした。タクシーは一瞬早く枝の下をくぐり抜けて大過なし。六時三十分広島駅頭に集合、学生十五名大風で大変だったと言いつながら無事に全員顔を揃える。今回の旅は、行脚とは言えず、文明の利器たる電車やバスやマイクロバスを利用しての旅という企画ゆえに、いくらか重裝備ながら皆々気楽な服装に重い手提げ荷物という次第にて、「瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立侍を、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさりがたき饑などしたるは、さすがに打捨がたくて路次の煩となれるこそわりなけれ。」という芭蕉の出立姿とは異なり、いくらか緊張感を欠く出発風景である。こんなことで、芭蕉の旅の追体験などとはおこがましき次第也と芭蕉様に叱られるだろうなど考えながら七時八分発のひかり四〇号の新幹線にてお江戸へと

出発。新幹線では、お江戸に下るといふ感覚にはならない、やはり経済大国日本の主都たる東京に上るといふ次第にて、追体験、追体験と呪文のごとくつぶやきながらの車中である。学生諸君は楽しく快談中、一気に東京駅に着く。途中曇天とて富士見えず、初めて上京の学生も居るのに残念な次第。傍目もふらず山手線・地下鉄と乗りかえて浅草、東武線にて日光に一直線である。

東武線の車中、都内を一步出ると、窓外の景色、行けども行けども平野、山が一つも見えないのに一驚する。広島の中国山地の谷間に育った私などは、朝晩山あり川ありの中で生活してきただけに一種の不安感に襲われる。中四国九州出身者多く、山国育ちの多い本学の学生たちも、頼りない感じという。かつて数年前、日光街道を踏破した時のことを想起してみるが、地上を歩いていると街道の家並や遠望する木々の繁みやで、山が見えないということを実感した記憶はない。もっとも、毎日猛暑の中の行脚で、歩くことのみ熱中して、周囲の風物に目をやる余裕はなかったようにも思う。とすれば、どちらが実感としてあるのか一寸判らないが、伊賀上野生れの芭蕉にしても信州諏訪生れの曾良にしても山国育ち、富士と筑波を遠望するしかない江戸の生活を離れ、数日と言っても三日間だが、あまり山を見ることのない旅を続けて、日光に着く。卯月朔日、御山に詣拝す。"という芭蕉の心情には、東照宮を拝する

という近世人として当然あるべき厳肅にして敬虔な祈りの気持と同時に、"山"そのものに対する山国育ちの人にあるがちな安堵感があったのではないかなど思う。東照宮の輪奐の壮麗さとか森厳なるただずまいについては、猶憚多くて筆をさし置ぬ。"としたらしい芭蕉なのであるが、ともあれ"御山に詣拝"して二荒の山についてのみ筆をついやしているところに芭蕉の心を垣間見る思いがするのは、車窓から見た武蔵野の印象が強烈すぎたからであろうか。すれば、かつての日光街道行脚の報告に書いた"あらたう"の句の解に、また別趣のあることも付け加えたくなるのである。山国育ちの芭蕉の、神山の青葉若葉に対した時の感動は、山かげ少い武蔵野を通して来ただけに、安堵感を含めて一層の深いものがあつたという具合である。など思いながら、乗り継いで日光駅に降り立つ。

午後三時過ぎ、広島駅から八時間あまり、瞬時にして日光なのであるから、今更のように追体験とは口幅ったくて憚られる次第也と鉢石町とで一顧もせず西参道までバス。お上りさんよろしく東照宮を"詣拝"するのであるが、華麗ではあるが何かチマチマとした感じがして、雄大とか森厳とかいう形容にふさわしくないと印象が、何度参詣しても同じであつて、"あらたうと"と"詣拝"した近世人たる芭蕉の感懐を追体験できないことを嘆ずるのみである。東照大権現のありがた味が全く実感できない私どもにとつ

ては、当然のことなのであろうが。

東照宮の参詣だけで時間が閉門となつてしまつて、二荒山神社と大猷院には参詣できず翌日廻しとして、中禅寺湖畔の民宿「みはらし」に向う。中禅寺湖をへだてて男体山が真向いに富士を小型にしたような姿を見晴らせる民宿で、肌寒さと風景絶佳を満喫する。夕食後、学生諸君と「おくのほそ道」の日光と白河の間の記述を復習してみる、黒髪山はすでに雪も消えて霞もかかつていない晩夏の風情である。

三

九月一日（火曜日）、昨日は広島を發つ時、日本海を北上する台風之余波に荒れ、東海地方ぐらゐまでは曇天であつたのに、東京では晴天、東武線を日光に向う車中も晴れ、日光ではやや曇天という有様であつたが、今朝は快晴である。男体山が早朝の青空にくつきり浮き上つて見える、まづは芭蕉に縁のなかつた華厳滝に向う。水量やや少く、滝口も欠落していくらか昔日の雄姿と異なる感があるけれども、日本有数の滝たるに恥ぢない飛流である。学生諸君は大喜び、まずは佳也とて、バスでいろは坂を下り神橋まで。本日の主目的は、芭蕉の日光での足跡「ウラ見ノ瀧、ガンマンガ測見巡、」（「曾良隨行日記」）をたどるのであつたが、

午後三時頃までに見終らなくてはならないという日程、神橋前の古い商店の前で鳩首協議、何とも残念ながら最も足を使わないですむタクシーで要所巡見という次第となる。となれば、時間的余裕ありといふので、昨日見残した大猷院と二荒山神社の参観から始めることとする。三代將軍家光公の廟所たる大猷院は、前の日光街道行脚の時に拝観した時の印象に比すれば、修復が進捗していて昔日の華麗さが再現されている感あつて、例によつてお上りさん然と見めぐる。仏壇を大規模にして極彩色の装飾を施したという態の建築群は、東照宮ほどではないが、人の心を安堵せしめるというものではない。赤い社殿の二荒山神社の方が、まだ簡素の美があつて、ほつと安心させるものがある。

次は裏見の滝である、前回見た天海僧正云々の案内板は失なわれて、タクシー駐車場付近は何となく雑然とした印象。山道を登つて滝に至ると、滝の前の流れに橋が架つていて、滝の真下まで行くことができた。前回も、台風の余波による増水で橋は流れてしまつており、流れも急で渡るのには不可能、結局木の間越しに遠望した裏見の滝であつたが、今回は真近に見ることができて、裏見の滝の在り様を実感できた。明治三十五年九月の大風雨による滝口の岩の崩壊によつて、芭蕉時代の滝口の有様を見得ないのは残念であるが、滝の下に立つて切り立った左右の岩壁を見上げると、「天狗の住家と云」（「日本鹿子」）十四磯貝舟也著元禄四

年刊」と記し、〃瀧裏のもとに石不動たゝせまします。峻乎として見るに身の毛立、すさまじき事言はかりなし。魔所にして荒怪有、晝にても凡人一人行がたし。不信不潔なる者いれば、忽ちさかれて瀧ちかく成木の枝にかけさらし侍ると也。〃(「国花万葉記」十四菊本賀保元禄十年刊)とある、近世人の恐怖感を誘出するに充分なる奇景である。瀧裏の岩壁中腹に、身軽な人だつたら辿れそうな道とも言える岩組みが山なりにあるが、それに取り付く勇氣は湧かない。「日光山志」五植田孟縉著渡辺華山等画文政八年序天保八年刊に見られる〃玆に荒沢不動の石像有て脇に籠堂あり。〃というお堂は見当らない。果して何処にあったのであろうか、夏籠の句に相応しい小堂あれば、「おくのほそ道」の句文の解にはドンピシャリなのであるが。ともあれ、暫時、瀧の冷気で心を静めることである。

次はガンマン(含満トモ懺悟トモ)測、「日光山志」によれば、日光八景の一つ〃含満驟雨〃の景あるところ、大谷川の一景で、〃大工町板挽町の方より大谷川の橋を越て向に有町家ゆゑ斯唱ふ、両側に廿戸許、夫より含満の大門路へ達す〃(向河原の「日光山志」の説明)というあたり、慈雲寺の廢寺跡を通過して大谷川沿いの小路を進むと含満淵である。慈雲寺山門の手前は、小広い庭園風の公園である、慈雲寺は〃伽羅陀山と号す、堂二間四方本尊弥陀地藏、慈眼大師の像を安ず、境内凡三四町、中興開山は慈眼大師の高弟な

る最教院見海僧正なり、此辺よりすべて含満と唱ふ、此所は山内衆徒年中行司の持とす〃とあるところ(「月光山志」、公園あたりも寺内であったのであろうか。山門を入ると、すぐに小さな本堂あり、立札を見ると、承応三年に創建された慈雲寺は、明治三十五九月の洪水で流出、昭和四十八年再建とある。多くの墓石や仏塔の並ぶ小道を大谷川沿いに進むと、霊庇閣あり、立札に〃日光山第五十四世座主の見海が承応三年(一六五四年)に建立した護摩壇で、天下泰平の祈禱所となつた。当時の建物はこわれて消滅したままになつていたが、昭和四十六年輪王寺によつて復元された。〃とある。護摩壇だつたという霊庇閣の前の川が、対岸の大きな岩の壁に梵字の浮き上つた含満淵である。豊かな流れが、岩石をかんで飛流して来て、淵で一つのよどみを作っている。岩壁の梵字は、空海の投筆というが、空海と見海の通音の誤伝なりと立札にある。学生諸君と一息入れて清澄の空気を満喫したが、ともあれ、〃見巡〃つたのであるから、芭蕉主従もこのあたりを歩み、景色を嘆賞したのであろうかと、往事を追懐することである。それにしても、この慈雲寺が、承応三年に天下泰平を祈念するという発願のもとに創建、護摩壇をも備えていたとすれば、芭蕉が日光周辺で見巡つた裏見の滝とともに近世人にとつて意味ある場所ということになる。承応三年というのは、三年前の慶安四年に三代將軍家光が死去、若い四代將軍家

綱（十一歳）の時代となっていたが、後光明天皇も二十二歳という若さで崩御、後西天皇が踐祚されるといふ政治的変動があった年、日光の地で天下泰平を祈念して慈雲寺が創建されたというのは、近世人にとって極めて意味ある事柄であったろう。それだけに、芭蕉主従の巡見には、ただ漫然と景勝の地を巡遊したというのではなく、それなりに近世人的宗教上の政治上の感情とか意識に支配されてのそれではなかったかとの思いが抜け切れないのである。前回の日光街道の行脚報告で、裏見の滝におけるコメントをしておいたが、それが含満淵の在り様によって更に補強されるのかも知れないと思うことである。

昭和の若人はタクシーで巡見であるから、時間の余裕あって霧降の滝見物と洒落込む次第、展望台からはるかに曲流する優美な滝を遠望する。緑の中に浮き上る滝も美しいけれど、滝の上の方に、深緑の絨緞のように見渡される霧降高原の美しさに圧倒される、しばし言葉なしである。

JRの日光駅で列車を待つ、九月に入って人影なし、この時期には観光客ありませんよと、私もだけの食事を作りながら食堂の小母さんが言う。アツケラカンとしている、その言のごとく、他に客の出入り全くなし。

午後三時一分発の列車で宇都宮、ここで黒磯行の普通列車で西那須野駅まで、駅頭に今夜から二晩お世話になる那須ペンション黒羽から出迎えを受ける。浄坊寺なる古風な

名前の持主たるオーナーが直接に出迎えて下さり、マイクロバスでペンションへ。駅を出てすぐ乃木神社行きの標識が見付かる、乃木將軍が一時隠棲していたところで、当時の粗末な住居がまだ保存してあるようであった。ホンの一寸しか居られなかったのだが、明治天皇への殉死で神となった將軍とて、早速神社ができたとオーナーの話。少し寄り道して遠くから望観、ところが学生諸君には一向反応がない、乃木將軍なんて今はやりではなさそうである。西那須野から黒羽までは相当の距離である、黒羽の町内に入つて、しばらくして川を渡る、那珂川という。那須岳を源流として黒磯市、黒羽町と南流し、栃木県から茨城県北部を東南の方向に向い、水戸市を通過して那珂湊市に注ぎ、太平洋に流れ出る大河である。黒羽での那珂川は、上流のこととてそれほど大河とは見えないが、やがて大河に変貌するであろう面影はうかがえる。昔は渡し舟で渡っており、渡し場に降りる道が今もあるとオーナーの説明。橋を渡つてしばらく行くと小高い丘あって黒羽城址である。大関氏一万八千石のお城のあったところ、一寸丘にのぼっていたくと小学校などが点在している。渡しの方は町家中心の町、渡しの今一方は小さな武家屋敷中心の町という感じである。その城址の裏側という感じのところは那須ペンション黒羽はある。

「おくのほそ道」で芭蕉は、
黒羽の館くわんだいじやうぼうじ代浄坊寺何がし

の方に音信^{おとづ}る”。という、那須ペンション黒羽のオーナーは浄坊寺直之と言われる。正に「浄坊寺何がし」の直系の子孫であられる、十七代目と言われる。笑顔は稚気あふれて大変魅力的だが、仏頂面をしてのいくらか面長のお顔は、館代の子孫というにふさわしい。武士風の大鬘を結い上下姿で大小たばさみ、お座敷に正座されたら誠に相応しいという風格のあるお方である。十七代目という歴史を背負うに値するお人柄とお見受するが、こうしたオーナーのペンションを引きあてたのは幸運、世話役の学生諸君のお手柄である。このオーナーが、明日からの「おくのほそ道」における黒羽から白河への道程を案内して下さるといふ、大ヒットである。黒羽名物の那珂川の鮎のあめ煮も付いた豪華な夕食をいただいて、明日の見学についてミーティングをする。俳句雑誌「寒雷」の同人で加藤楸邨氏の弟子と言われる直人氏のお話を拝聴、明日への期待に胸ふくる思である。芭蕉の通った路をそのまま辿ると最低三日間にかかるとのこと、二日間の予定故に、直人氏悩んでおられるごとしであった。

「那須ペンション黒羽」の宛名次の如し。

324-02 栃木県那須郡黒羽町前田九三二

TEL 〇二八七五 四一三三三

四

日光を発って黒羽に向うところの「おくのほそ道」の文章は、冒頭「那須の黒ばねと云所に知人あれば、是より野越^{ごえ}にかゝりて直道^{すぢみち}をゆかんとす。」とある。「是より」と「野越」と「直道」に関して、地理的に言って諸説あるところである。

次節の「遙^{はるか}に一村^{いつそん}を見かけて行^{ゆく}に雨降^{あめふり}日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明^{あけ}れば又野中^{のなか}を行^{ゆく}。」については、「曾良随行日記」によって玉入という村の名主の家に宿ったことが判っており、それについての「おくのほそ道」の記述が事実をそのまま記したとすれば（私自身は、少くもこの部分は事実の記述と考えている。「宿悪故、無理二名主ノ家人テ宿カル」ということであつたのであるから、殊更印象深く、事実を完全に無視し得なかつたであろう。）、「明れば又野中を行^{ゆく}」つたという道は、「曾良随行日記」に記された道であろう。それを地名をひろってみると、玉入を立つて二里八丁で鷹内、鷹内より矢板へ沓里弱、矢板より沢村へ沓里、沢村より大田原へ二里八丁、それから大田原より黒羽へ二里から三里ということになる。黒羽で少少行き過ぎて、翠桃宅のある余瀬に行くために二十丁ほど後もどりしている。まことに単純明快であるが、これを実際に地図の上で辿ってみると、現在の五万分の一の地図で

は、単純明快ではない。

まず「鷹内」であるが、今の地図にはその地名が見られない、旧版岩波文庫脚注に「塩谷郡矢板町に属す」とあり、距離的に見て、「幸岡」とある少し手前の集落でもあろうか。「ヤイタ」はもちろん今の矢板市の中心を指すであろう。「沢村」というのは、今は那須学園などがある「沢」という矢板市の郊外であろう。ここから大田原への二里八丁、大田原から黒羽への「三リト云云二リ半余也」というところは、今の地図でどうなるか。まず大田原への二里八丁は、沢から小さな路を進んで箒川を渡り、下薄葉を通じて実取団地とあるあたりから加治屋を経て大田原となるのであるろうか。このところ、当時は街道として整備されていたかどうか、沢から箒川沿いに少し南下すると、奥州街道の佐久山の宿場がある、大回りであるが、佐久山を通過して箒川を渡り大田原に向えば、街道として整備された道であった。芭蕉主従は、ここは近道を選んで真直ぐに進んだようである。大田原は、太田原和泉守、一万千石余の城下町である。その大田原からは、黒羽街道を通過して南金丸、西坪、山野などという集落を経て黒羽の町へ着いたのである。那珂川の西岸、町家の多い町並みにたどり着いた芭蕉主従は、翠桃宅は余瀬と聞いて、那珂川を舟渡りして大関氏の居城たる黒羽城の側にある桃雪宅に行かず、ここで逆行の形で余瀬に向ったのであろう。南金丸の那須神社あ

たりから少し北方にそれて余瀬に向えば、旅程としては大分節約できたはずであった。そのところを日記で「アトヘモデル」と表現しているのであつて、同じ道を逆行したのではなさそうである。今市から今の塩谷町（玉生あり）、矢板市、大田原市を結ぶ道を日光北街道と呼ぶようである。そして矢板から大田原、大田原から黒羽は、正に那須野と呼ぶに相応しい地形である。

「是より」を日光よりと解する注釈は多い、では日光から玉入までの道程はどうであったのか。日記によれば、仏五左衛門の案内によつて、「日光ヨリ廿丁程下り、左へノ方へ切レ」という、「日光」とは五左衛門の宿のあった上鉢石を指すであろうから、そこから約二千米強の所から左の方へ向い、大谷川を越えたのである。今の地図で申せば、JR日光駅より下手、当時は杉並木が林立していた通りを下り七里とか宝殿とかいう地名のあたりから左に折れ、今の所野公園あたりの大谷川を渡つて愛宕山（五一〇米）茶臼山（五一七米）などという山麓を、大谷川沿いに下つていったように思える。日記では、「セノ尾・川室ト云村ヘカ、リ、大渡リト云馬次ニ至ル。」とある。久富哲雄氏の「『奥の細道』を歩く事典」では、「七里村の大谷川にかかる筋違橋のたもとを「左へノ方へ切レ」て奥州古道に入り」と記す。「奥州古道」がいかなる道か確認し得ないが、さもあらんか。今の地図で見る瀬尾、川室という集落を結

んで大渡に至る線は、日光から今市に下って大谷川を越え、豊田、芹沼、轟などという集落を経て大渡に至る線に比して、曲折多くむしろ長くて難路の感があるが、当時は間道の便利な近道であつたのもあろう。大渡のところでは鬼怒川（少し下流で大谷川と合流して本格的な大河の様相を示すようである。）を渡れば（日記に「絹川ヲカリ橋有。大形ハ船渡シ。」とあるが、芭蕉主従が渡った時は、板を渡したような仮設の橋があつたのであろう。増水すれば、板橋では無理とて舟渡しになるといふことなのであろうか。）、船入とか板橋とかいう集落を通つて玉生に至る日光北街道を芭蕉主従は歩いたのである。この間、左手は六百米から四百米ぐらいまでの山が連なっており、右手も石尊山（四八〇米）のごとき小山があつて、山間を抜ける道という感じのようである。玉生から矢板にかけての日光北街道も、那須野という感じではなさそうである。

さて「おくのほそ道」の那須の冒頭の文章であるが、諸説を列記する煩に耐えないので、諸説を集大成している「詳考奥の細道」増訂版から見ていく。「是より」について、「〔岩田・詳講〕は「地理的に見れば矢板辺を穩当とする（斎藤氏説）」とあり、那須野が原の野越とすれば、それでよからう。しかし、次の一村の宿泊を玉生村とすると、矢板では行き過ぎてゐることになり、日光辺となるといふ。

〔勝峰・創見〕は、大渡の馬次から船生に出て、そこから

の野越と見る。だがまた、この「野越」には「菅菰」以来多くの人が感受してゐるやうに、すでに那須野の趣きがある。この辺は例によつて事実^{じじつ}にこだはずに書かれてゐるのであらう。"と見える。要は矢板よりとの説と日光よりとの説の両説の外に船生よりとの説もあつて、結論的には地理上のことは「事実^{じじつ}にこだはず"に莫然と「是より」としたといふのである。これらの説を踏まえて、「奥の細道講読」では「「是より」といふのは、どの辺をいつたものか、といふことについて、矢板辺という説と、船生^{ふねう}辺という説がある。那須野を野越したとすれば、矢板辺とするのが地理的に見て妥当であらう、しかし次の一村の宿泊地が曾良の日記によつて玉生^{たまにゅう}だとすれば、矢板では行き過ぎることになる。そこでこれはやはり大渡の宿場から船生に出て、その辺から野越にかかつたと見るべきだといふ説も出てくる。だが、こういう考は那須野ということに拘泥し過ぎてゐるように思う。前段には裏見の滝のことが書いてあり、芭蕉等はその滝を見物して、昼頃鉢石をたち、宿の五左衛門に教えられた通り、今市にもどらずに、途中から左に折れて、川室・大渡・船生を経て、那須の黒羽に行こうとした。それは今市から大渡を出る道よりも、近道であった。本文に「野越にかゝりて、直道を行かんとす」とあるのは、この近道をいつたものと思われる。そうだとすると、「是より」といふのは、「日光を出てから」というこ

とになるであろう。"と委曲を尽して詳細である。「おくのほそ道全講」でも、「是」に注して「日光のこと。「ここ」とも訓める。"と言う、曾良の日記に即して今市に廻らずに大渡に向ったことを「直道」と解して、それに基いて「是より」を解そうとするのである。結局は、詳考のごとく場を確定せずしておくか、日光と確定するかに分れるといえようか。

「野越」については、ノゴシ・ノゴエの両訓の意見あり、小島吉雄説「奥の細道ところどころ」のノゴエと訓むべきとする説が有力で、解もそれに従うべきであろう。「野」の意は、山地でなく平板な平地を指すは自明とし、実際は那須野を指すとは注解者暗黙の了解のごとくである。

「直道」についても、詳考によれば訓み方にジキダウ・タタミチ・チョコクダウ・ヒタミチなど諸説あるが、曾良の日記に「スグ道」の用例あって、「スグミチ」と訓むが一般化し、その用例は追加されるに至っている。当然迂回せずに真直に近道する道という意となる。近時の諸解は一致して右のごとくであるが、実際の芭蕉主従が通つた「直道」はどこを指すかでは諸説ある。これも詳考によって記すと、「杉浦・校註」曾良の近畿巡遊日記七月八日の條に「染井等尽見テ直道ヲタル广ニ行」等とある。宇都宮を迂回せずの意であろう。「井本・新解」今市まで引返さずに、途中から東に折れて行つたこと。「宇佐美・全解」道

は縦横に分れてをり、芭蕉たちは難儀したのであるから、こゝは一筋道という意には解せない。「松尾・精解」こゝでは近道をまっすぐに行くこと。「今井・全釈」仏語で、迂回せず直ちに涅槃に到る道をいふ。"となる。「宇佐美・全解」以下の説は実際の道の解に係らないので除外して可、結局(一)に宇都宮に迂回せずという説、即ち奥州街道を利用しなかつたことを指すとする説と、(二)に今市に迂回せずという説、即ち曾良の日記の大渡までの道を「直道」とする説に分れよう。近時の解でも、講読は前出のごとく(一)の説、全講は(一)の説である。(一)説の代表として飯野哲二説を掲出しておく、「直道、真直な道。日光街道を今市まで引き返し、ここから宇都宮の方を迂回せずに、直接に玉入・矢板を経て黒羽に行く街道。奥羽各藩の参覲交代に日光廻りの際にはこの街道を通る事があつた。"（「奥の細道・芭蕉俳論精講」研究と評釈）

ところで、この(一)説に近いのであるが、更に限定したところを指すとする説(三)がある。「おくのほそ道」を俳句に堪能な土地の人士として読み続けておられる浄法寺直人氏は、矢板から大田原へと芭蕉主従が辿つた道を「直道」と限定されるのである。曾良の日記によって、矢板までの道を熟知されている直人氏は、土地の人の直感として、当時の人は宿駅として整備されていた奥州街道の佐久山に南下して、それから大田原に向うのが当代人の安全な旅程であ

ったとされるのである。それを、街道としては必ずしも整備されていない矢板と大田原の間の道、これをしも日光北街道と言ったかどうかは不明であるが、これを芭蕉は「直道」と言ったとされるのである。那須野の街道を熟知しておられる、土地感のある人の説として傾聴すべきであろう。

ところで、この文章の最後、「ゆかんとす」については、自明のこととしてか、諸注釈には注解が付してない。古注は別として、近時の注釈書では、現代語訳が付してあるの
で、それによって注解者の見解をうかがうことができる。
受験参考書は、最も原文に忠実な訳をする傾向があるので、
まずは今頃の受験参考書を見てみる。「文法全解・おくの
ほそ道」飯田満寿男著は受験参考書風に詳細である、「行
かんとす」と本文に注し、訳は「行くことにする。」とあ
る。（カ）
四未意・終格助サ変・終
る、更に説明として、「ん」は意志の助動詞の終止形。

「と」は引用の格助詞。「す」はサ変動詞。「んとす」で
「しようとする」の意だが「……することになった」「…
…するつもりである」なども訳せる。なお「んとす」が
つまって出来た一語の助動詞が「んず」である。「とある。
他も同巧異曲の訳であるが、
「行くこととした。」
「明解シ
リーズ・奥の細道」郷衡著、「行くことになる。」
「精選
古典・奥の細道・笈の小文・野ざらし紀行」西谷元夫著、
「行くことにした。」
「古典新釈シリーズ・おくのほそ道」

野崎典子著などに集約される。中でも、「行くことにする。
」という訳が一番多いようである。もっともこれらの受験
参考書は、「これより」「野越にかかりて」「直道」の実
態について考えようなどという意志はなく、「ここ从那須
野越えにかかって、まっすぐに近道に行くことにする。」
前出文法全解というように、のっぺらぼうな通釈ばかりで、
無性格なこと現今の高校教科書のごとしである。それに比
すると、現代語訳付きの文庫本は、それなりの主張がうか
がえるようである。旺文社文庫は、文庫の性格上からも無
性格で「これから野越えにかかって、近道に行くことにし
た。」とあるが、角川文庫は「行くことにする。」と優等生
的ではありながら、「これより本街道へ迂回せずに、那須
野越えにかかって、まっすぐな近道を」と意見を述べる。
講談社文庫は「ここから街道を外れて那須野横断をして直
線コースを歩きはじめる。」と個性的であるが、「歩きはじ
める。」という表現では、芭蕉の意図が充分くみとれない
と思われるが、いかがであろうか。ところで、新潮文庫に
は、長年の「おくのほそ道」の实地踏査による研究の成果
ともいべき萩原井泉水の「奥の細道ノート」があり、独
特の見解を述べる、従前の注解者は井泉水の見解を無視す
る傾向が強いけれども、日光から黒羽への道程についての
井泉水の見解には、聞くべきことが多いようである。彼は
自分の实地踏査にもとずいて「さて、日光山をおりて、

黒羽へ行くには、今市を過ぎて矢板まで八里、これは迷うところは少しもない。矢板からが所謂「那須原」（那須野ともいう）だが、途中大田原から黒羽街道がある、これが六里。二日としてらくなコースである。〃という前提をおき、曾良の日記を参照しながら、まず日光から玉入までの道程を土地の人に聞いたと言う。その話〃日光から今市を通らずして大渡へ出る道は今もある。その道程の差は弓の竹と弓の弦の差であって、大した近路でもない。上り下りが多いから果してとくかどうか。それは所野・高白・川室という在所を通る。日記に「川ヲ越」とあるのは板穴川という霧降の滝の下流である。大渡まで出れば、今市から矢板に通ずる日光北街道であって、昔も今も好い道である。船入ふねいりというのは鬼怒川（日記には絹川とある）の渡しである。〃「船生」と書くのが正しい。西船生・東船生・玉生（日記には「玉入」とある。芭蕉は午刻に日光を出てきたというのだから、玉生まで六里。日はとつぷり暮れたと見える。日光名物のひどい雷雨にあって困難したのであらう、と。〃とある。所野・高白・川室という道筋は、日記と異なる。毘沙門山（標高五八六米）の北側の山麓を廻ればそれ、芭蕉主従は前記のごとく南側の山麓を所野・瀬尾・川室と通つたと、日記によれば解すべきである。それを除けば、この話は正しいであらう。次いで井泉水は、当面私が問題としている文章を引用して〃ここではまだ「野

越え」という言葉を使うべきところではない。（那須原は矢板から先きである。〃とする、そして〃農夫の家に一夜かりて云々〃を〃デフォルマション〃と規定、次いで玉生以後の道程について日記を参考としながら、次のように述べる。〃実際は玉生より矢板まで二里である。矢板は陸羽街道の宿場である。ここから陸羽街道をまっすぐに北上すると、那須原を横断して——現今の鉄道奥羽本線と大体平行して——黒磯に出、高久から山道にかかって白河に出る。矢板から一里ばかりの所で道がY字形になって、東にとると、大田原に出る道がある。これは日光北街道というもので、那須原のほんの一部を通る。那須原なるものは、東西六里、南北七里、レモンのような形をした荒野であって、その北端に那須温泉がある。大田原はそれと対蹠的な南端にあって、レモンの端つぼのような処である。芭蕉は矢板から大田原へ出るのに、北街道を通つたならば、道に迷う心配はなかったらうに、土地の人に近径ちかぢを行けと教えられて、曾良の日記にある通り沢村にかかったと見える。「奥の細道」にある「野越えにかゝりて直道をゆかんとす」というのは、この時の感じであらう。〃日光北街道というものが、矢板から大田原までの道として、芭蕉たちの通つた沢村經由の脇道と佐久山を通つて大田原に通ずる街道の中間にあるのかどうか、私は知らない。少くも今の五万分の一の地図では見当らない。ただ芭蕉の通つた路としての理解

は、この通りであろう。ところで、当面する「んとす」についての井泉水の直接的言及はない、が彼の理解したところをたどると、実際に通った道の「感じ」をかく表現したということになるか。ところで、一般の通釈書であるが、「んとす」についての現代語訳は、大同小異である。代表的なものを二・三挙例する、「寄り道しないで行かうと思ふ。」〔詳解〕奥の細道の新研究〕大正十五・一大籾虎亮〕「黒羽を目標に近い一すぢ路を往かうとする。」〔奥の細道新釈〕昭和十一・十三浦圭一〕「まつ直ぐな道を行かうとします。」〔増訂奥の細道詳講〕昭和十二・三岩田九郎〕「捷徑ちかみちを行かうといふのである。」〔奥の細道評釈〕昭和十九・四種口功〕
「真直に道を行くことにした。」〔奥の細道・芭蕉俳論精講〕昭和二十五・三飯野哲二〕「まつすぢな道を行こうとした。」〔奥の細道評釈〕昭和三十一・九・志田延義〕「近道をし、黒羽に出ようとした。」〔奥の細道評釈〕昭和三十四・三杉浦正一郎〕
「近道をまつすぢに行かうとする。」〔詳考奥の細道〕昭和三十四・九阿部喜三男〕「近道を行くことにした。」〔奥の細道講読〕昭和三十六・九麻生磯次〕「まつすぢに一筋道を行こうとする。」〔おくのほそ道全講〕昭和四九・十一松尾靖秋〕などである。松尾全講以後、まとまりのある新しい注評釈類は出版されていないようであるから、如上の挙例が大約の傾向を示していよう。要は千遍一律で、「行かん」とす」に特別に配慮した口語訳は見当らない、すぐ前に位置する

「直道」に捉われた口語訳が多いと言えるようである。ところで、「おくのほそ道」における「んとす」の用例を採ってみると、尿前の関のところ、「出羽の國に越んとす。」とある。日光から那須野を越えて清風という設定に設定と、平泉から出羽への大山を越えて清風という設定には妙に似通う点があるけれども、そんなところに興味を持つのは三題噺の戯作調なりと笑殺されるが落であるが、「んとす」の語気には共通するものが認められないであろうか。那須野も出羽国への大山越も未知の道である、日光では仏五左衛門にその未知の道順を聞いたようであるし、尿前の関では「封人ほうじんの家」の「あるじ」に未知の道の難所たることを聞いている。そこで日光では「行かん」と決意し、尿前の関では「越こえん」と決意しているのである。この意志を、一度客観的に突き放して「と」という格助詞（「引用」の格助詞と文法上は言うのであろうか。）で受け、それをもう一度能動性を有するサ変動詞（「増補雅言集覽」に「物を為す時」として土佐の例「いさゝけきわざせさす物もなし」を挙げる。サ変動詞の有する性格を示していよう。）で自己の決意もしくは意志を再確認しているのではなからうか。そこには、未知の原野たる那須野を行こうという芭蕉の意志、未知の難所たる出羽国越えを越えようという芭蕉の意志が、第三者の認知を含めて再強調されているのではないであろうか。

ここで「んとす」という表現を、岩波文庫の「芭蕉紀行文集」に探ってみる。意志の助動詞ん十と十動詞という文章表現のあるところは、「鹿島詣」の冒頭文「前略」このあき、かしまの山の月見んとおもひたつ事あり。「など」のように散見するが、動詞の部分サ変動詞であるのは、「笈の小文」に二例、「更級紀行」に一例、見るを得た。「更級紀行」の例は、共に旅した「六十斗の道心の僧」が、苦吟する芭蕉の姿「灯の下にめをとち、頭たゞきてうめき伏せば、」を見て、「旅懐の心うくて物おもひするにやと推量して、我をなぐさめんとす。」とあるところに見える。ここは芭蕉自身の行為について述べたのではなくて、極めて善意なのであるが「風情のさはり」となる道心の僧の行為として記述されているところであるので、別趣の解あるべきところ、「笈の小文」の二例は次のようである。(一)に江戸を発って東海道を進み、東海の各所で連衆と歌仙を数回催してから、「師走十日餘、名ごやを出て、旧里に入んとす。」とあるところ。(二)には大和・芳野と経廻つて、須磨に至り、「きすご」の干物を鳥が取るを「にくみ」、弓でおどすを見て「海士のわざとも見えず。」と「若古戦場の名残をとどめて、かゝる事をなすにやと、いとど罪ふかく、猶むかしの戀しきまゝに、てつかひが峯にのぼらんとする。」とあるところである。(一)例は、「旧里」即ち芭蕉の生地伊賀へ「入」というのであるから、既知の道を行く

のであつたらうから、即ち桑名から関までの東海道、四日市から石薬師を拝し亀山城下を通つて関の地蔵の宿場に着き、ここで東海道と別れて伊賀上野に向うという、極くありふれた道筋を進むつもりであつたらうから、特別に意を決するほどのこともなかったのであるが、実はこの途次において大きなトラブルを生じているのである。「日永の里」(三重県四日市市日永町)から馬で「杖つき坂」(三重県四日市市采女町と鈴鹿市石薬師町との間にある坂)を「上る」途中で「荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。」となつたのである。かつて東海道を行脚した時の記憶では、鈴鹿峠の峻険のみが印象に強く、関から亀山までは平坦な下り道であり、石薬師から四日市までも特別大きな坂があつたとも思えないのであるが、一方的に下るばかりであつたので、楽で平坦な道という印象になつたのであろうか、ともあれ芭蕉はここで落馬しているのである。そこで芭蕉は、
歩行ならば杖つき坂を落馬哉
と物うさのあまり云出侍れ共、終に季ことばいらす。
と苦吟を残すのである。「旧里に入んとす。」その時に落馬することを予想していたわけでは勿論ない、とすれば私流に言う客観性を有する強調表現である「入んとす」という表現をここに提示する必然性もないと言えようが、この文章は勿論のこと落馬という体験あつて後に執筆したものであるから、この文章を書く時に、落馬したというトラブ

ルの印象が一種の緊張を芭蕉の筆に与えたのであり、その上に

旧里ふるさとや臍はその緒をに泣なくとしの暮

という句を残す、苦楽・悲喜こもごもに想起されるなつかしの故郷にいざという高揚した気持とあり、その相乗効果が「入んとす」という表現を生んだのではなからうか。(二)例は、「猶むかしの戀しきまゝに」即ち芭蕉の大好きな源平合戦の古戦場を訪れようという高揚した気分があり、その上「てつかひが峯」即ち「神戸市の西境、東南に一の谷があり源平の古戦場として名高い。」(岩波文庫脚注)という場所へはもちろん未知の道であり、しかもそれは「導きみちびする子のくるしがり」という険しい道、芭蕉の文章によれば、「羊腸嶮岨やうちやうけんその岩根いはねをはひのぼれば、すべり落ぬおちべき事あまたゝびなりけるを、つゝじ・根ざゝにとりつき、息をきらし、汗をひたして、漸雲門やうくに入こそ」という難路、この芭蕉の文章には白髪三千丈式の誇張表現があったとしても、鹿も通わぬと言われた一の谷への軋越の路であってみれば、近世においても相当に難路であることは十分予想できたはずの峻険、そこに登ろうというのであるから、これらの諸条件が相乗効果となって、ここにおける「のぼらんとする。」という表現を生んだのであろう。とすれば、これらの用例はともどもに、「おくのほそ道」の二例と共通項を有する表現と言えるのであって、「んんとす」という表

現の私流解釈を補強するものと言えよう。

ここで、日光の宿屋における芭蕉主従の言動について考えてみよう。「正直偏固へんこの者」たる上鉢石町の宿屋の主人仏五左衛門との間で、どんな問答があったであろうか。日記によれば、五左衛門が「案内ヲ教へ」て瀬尾・川室・大渡という道を選んだというのであるが、その時に五左衛門はそれだけを教えたのであろうか。「無智無分別」と見受たけれども「氣稟きりんの清質せいしつ尤もつとも尊ぶべし。」と信頼している芭蕉主従は、大渡までの道順のみを聞いたはずはないであろう。まずは、裏見の滝から含満淵を巡る道を探ねたはずである、それは五左衛門にとつて得意のもの、懇切丁寧な案内があったはずである。更に、芭蕉主従は、次の目的地たる黒羽、しかもその館代たる浄坊寺図書兄弟を訪れたいがと、そこに至る道順についても聞いたに違いなかった。仏五左衛門は、宿屋の主人、本人が例え黒羽までの道順を往復した経験がなかったとしても、(当時の人のこと、この程度の行き来の経験がないはずはなかったけれど、)そのあたりの道程は耳学問で十分に知悉していたはずである。しかも那須七党の一族たる黒羽の館代浄坊寺様をおたずねになるのだと知れば、一介の乞食坊主とも見られる芭蕉主従も相当に由緒のある人と見えるはず、殊更に五左衛門は丁重に道順を教えたはずである。大渡までの近道、そして矢板から大田原までの近道について語る、そして案内そ

した仏五左衛門のなまりのある言葉の中に「野越」とか「直道」とかという語句が使われたかも知れなかったのである。もしそうであれば、芭蕉の脳裏に強く印象付けられたはずであった。五左衛門は、その道が近道であるとともに、多少は難渋する道であることも告げたであろう。大廻りだが安全にして歩き易い街道筋のことも教えたに違いなかったが、日光参詣を終って一日も早く次の目的地たる黒羽に急ぎたかった芭蕉主従は、真直な近道を行くことを決意する。その決意表明として「んとす」という語法が採用されたのであり、ここに「是より野越にかゝりて直道をゆかんとす」という表現が生まれたと考へてはいかがであらうか。

「是より」は、仏五左衛門に直道について聞いた日光の鉢石よりとなり、「野越にかゝりて」は、仏五左衛門の話により予想される矢板から大田原に至る那須野を含む全道程を越えて黒羽に至る、その野越に取りかかるといふのであり、「直道を」は、仏五左衛門に教えられた日光鉢石より黒羽に至る各所の近道を指し、「ゆかんとす」は、これから難渋するかも知れない近道を通って、一刻も早く黒羽に着きたいという芭蕉主従の意志の表明であるのごとくに理解してはいかがであらうか。

仏五左衛門の、恐らくは田舎ぶりに懇切丁寧な教示によつて、「是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。」と決

意した芭蕉の脳裏には、日光鉢石から大渡までの杣道も、鬼怒川の渡しも、船生から矢板までの日光北街道の山あいの道も浮ばなくて、荒漠たる那須野の高原が現実感を伴って迫ってきたのではなかったか。詩人としての芭蕉の幻想の中には、案外、かさねという小姫の挿話も、その萌芽を生じていたかも知れなかった。

五

九月二日（水曜日）、黒羽の早朝は肌寒い、「浄法寺某」の末孫たる浄法寺直人氏経営の那須ペンション黒羽の玄関は、人が出入りの度にキンコンカンとミュージックベルが響く、十数名が出入りすると少々けたたましいが、早朝七時にペンションの周辺を散策する。黒羽城主大関氏の墓所のあるという大雄寺見学が主目的である。

ペンションの裏側に道があるらしいので、裏に廻ると、ペンションと古い住宅の中ほどに小高い所あり、桃雪庵跡の石碑がある。直人氏が師事される加藤楸邨氏揮毫の芭蕉句碑あり、

山も庭もうごき入るや夏座敷 楸邨書1959

と読める。今一基、昭和五十五年に直人氏が建てられた石碑あって、やはり楸邨の書で、曾良の俳諧書留に見える、後に「信夫摺」「雪丸げ」に収載された「雨晴て栗の花咲

跡見哉「桃雪」を中心とした詞書と等躬・翁・ソラの表四句が記されている。碑の裏に、

昭和五十五年仲春

第十七代桃雪亭々主

浄法寺直之建之

第十一代野田石材店主

野田征行刻之

と見える。深い木立の影に浮き上って見られるこれらの文字に、当主直之氏の思い入れの深さを感じる。その石碑のある場所を通り過ぎて立入禁止の札ある柵越しに古い住居がある、浄法寺直人氏の個人住宅であった。後に直人氏のお話によると、今でも御使用とのこと、明治初年に大火で全焼失、その後建てたもののよしである。その大火の時に焼失したか、芭蕉の真筆類の伝存の口伝はあるのだが、今は全く見当たらないと言われる。家には盛衰あるから、焼失しただけではないかも知れないがと、ニコッと苦笑いされる直人氏、まことに率直で正直なお人柄とお見受けした次第である。

この住宅を通り過ぎて大雄寺に近付けそうにないので、再びペンションの入口の坂道を降りて正式の道で大雄寺に向う。要するに浄坊寺家と大雄寺は隣り合せなのであるが、両家を直接結ぶ道がないようなのである。黒羽山久遠院大雄寺（曹洞宗永平寺派）の山門を通つて経蔵らしき建物の手

前を左手に通つて山に入ると墓地である。正面に黒羽城主大関氏の大名墓が並んでいる、徳川家から入嫁されたとかいう夫人の墓で、特別仕立ての墓も見当る。大関氏の墓の前に、家臣団ともいふべき家のものと思われる墓地が、整然と並んでいる。今はやりの霊苑なみであるが、古色蒼然としており、人間の営みの終焉の地としての霊感がただよっている。浄法寺家の墓地は、その家臣団の墓地の最上席とでも言うべき位地に存在する。自然石の墓が浄坊寺図書高勝俳名桃雪のものとか、法名はよく判らないが「随如軒寛心大裕居士」と刻されているとのことである。

桃雪の墓探索に時間を費し、朝食の時間が迫ったので大急ぎで大雄寺の境内に入る、禅寺にしては掃除が行き届いていない感じであるが、草ぶき屋根の古い大きなお寺である。栃木県の重要文化財に指定されているようであるが、江戸期の田舎の大寺の風情をよく残しているたまたまいである。本堂の右手に古い庫裏があり、その向う側に豪華な住宅が新築中である。山門を入つて経蔵左手に、更には本堂を中心に回廊あつて鐘楼・庫裏と配置された枯淡の趣きが破壊されている感がある。田舎の寺にしてはお金持で、商売上手なのかなといらざることと思う、観光化しているわけでも何でもなく、そういう面はむしろ投げやりという感があるだけに、一寸奇異の感がする。

朝食の時、直人氏に、大雄寺の奇異の印象を申しあげる

と、大壇越のはずの直人氏、極めて率直に俗化している僧侶の在り方について嘆かれるのである。金集めが上手だと言われるのである、どうも金もうけが上手とは言えなさそうな直人氏の口から出ると、真実味がある。昔からの大壇越でありながらも、今の太雄寺の在り方には批判的であるようである。問わず語りに語られる直人氏の言葉の中に、十七代も同じ場所で、栄枯盛衰はありながらも、世間に白眼視されることもなく、この土地に馴染んで、しかも尊敬されながら人の営みを続けて来たという誇りと自信をうかがうことができるのであった。

六

心尽しの朝食をすませて、九時前集合、直人氏の御案内で、マイクロバスに乗って雲巖寺に向う。マイクロバスまかせであるから、どういふ街道を通ったのかは、以下の紀行記すべてが類推にもとづくものであるが、ペンションから黒羽城址沿いに少し北上して前田という集落から左の道に折れ、一筋の道をくねくねと進む。道沿いに点々と農家らしきがあつて田園の野中の道であるが、しばらく進むと山間の道となる。地図で見ると、天神前とか清水内という集落を過ぎたあたりから山間いということになる、那珂川の支流である野上川沿いに上流に向う形である。そして

唐松峠という一山を越すと小学校などもある須佐木の集落、それを過ぎて山間いに入って武茂川（黒羽より那珂川の下流である馬頭町あたりで合流する那珂川の支流、八溝山より流れている川である。）に沿って進めば雲巖寺である。

この道三里あまり。十三kmと直人氏の示教である。

「おくのほそ道」には、芭蕉が参禅したことのある仏頂和尚山居跡ありというので、黒羽の周辺の神社仏閣を経めぐった後、雲岩寺に参詣したことになっている、随行日記によつて、この記述に前後あることが判明しているが、そのところ、^{その}其跡みんと雲岩寺に杖を曳ひば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打うちさはぎて、おぼえず彼麓かのふもとに到る。」と記す。日記では、「一 四日 浄法寺図書へ被招。一 五日 雲岩寺見物。朝曇。両日共二天氣吉。」と素気ない。

「杖を曳く」という表現は、「杖」が元来歩く時の補助的手段としての道具であるから、一般にぶらぶらと散歩に出かけるとか遊山に行くという時に用いて、元来歩くことを原則とする。芭蕉も歩いて雲岩寺に出かけたのであろうか。

雲岩寺見物の前日、芭蕉主従は余瀨の翠桃宅から桃雪宅へ「被招」ており、そのまま十日まではそこに泊つて行動しているごとくである。「雲岩寺見物」の時は、「若き人」が多く連れ立っており、にぎやかに「打さわぎ」ながらの

行動で、それにまぎれて「おぼえず彼麓に到る」のであって、歩いての雲岩寺参りのようでもある。片道三里あまり、往復六里であつてみれば、当時の人にとつて大した距離ではなく、一日の行動としては楽なものであつたらう。

ところで、ここにいう「若き人」とは、どのような人を指しているのであろうか。桃雪宅に泊つての行動である、当時二十九才だつたという桃雪は亭主であるから当然参加してしよう。桃雪の弟翠桃は二十八才、鹿子畑家のある余瀬からは二十丁あまりであるから、彼も参加していたらう。

「若き人」にこの二人は欠かせない、その外は彼らの俳諧仲間と家来たちということになるか。句仲間は当然同年輩の人たちで、これも「若き人」たちであつたらう、家来には老齡の人も居たかも知れないが、身分社会のこととて「打さは」ぐという談笑の仲間に加わつたかどうか、ただ付き従つてきただけで、芭蕉主従にとつても「若き人」の中に入れていなかったであらう。この「若き人」たちは、この黒羽においては身分高き人たちであつた。桃雪は「館代」であつて、家禄五百石、当時の城主大関増恒は五才で江戸在であつてみれば、桃雪は殿様代理という地位、しかも大関氏と浄坊寺氏とは元来近世的主君と家臣という関係であつたのではなく、黒羽地方の豪族が戦国の世を生き抜くために連合体を形成、その盟主として大関氏が選ばれたという関係（直人氏の談。その豪族の一つに金丸氏あり、

近世初頭のお家騒動で金丸氏は破れ、流浪して山梨に落ち着き、今の金丸副総理の先祖となつたと言われる。金丸の地名は今も残り、北金丸・南金丸もあつて、大関氏に次いでの大豪族であつたようである。近世初頭の在地豪族たることを廃止して、家臣団を再編成するに際してのお家騒動であつたのであろう。近世的形態を受け入れた浄坊寺氏が館代として生き残つたのもあつたらうか。この地方における家格は高いのである。翠桃とて同じこと、長男桃雪は母方の浄法寺家を継いで館代となり、次男翠桃は生家鹿子畑家を継いで、家禄四百五十石であつた、ともに当地方における名家といつてよかつたのである。そういう家格の人を含む「若き人」たちと、その師にあたる芭蕉とが三里あまりある雲岩寺に出かけたのである、徒（カチ）でなく馬を使ったのではないかという感じを、私は持っている。

随行日記の記録は、「見物」とだけで素気なく、馬のことには触れていない。馬の記録がないと、馬を使つていないのかどうか、随行日記には「馬」の記録が数多く見られる。例せば、「おくのほそ道」にも殺生石のところくわんで「館代だいより馬にて送らる。」と記しているところ、日記では「十六日」のところであるが、「及晝圖書彈藏が馬人ニ而被送ル。馬ハ野間ト云所ヨリ戻ス。此間貳里半餘。高久ニ至ル。」と記す。（直人氏は、桃雪の厚意なのだから高久まで馬で行けばよかつたのに、芭蕉が遠慮したのだらうと

言われる。桃雪の地位に対してか。馬で送られるという厚遇を受けているのは、次の桃雪の依頼あって、桃雪の威令が行なわれている感ある高久で、"十八日"の項に"馬壹疋、松子村迄送ル。"とあり、更に須賀川の駅長という等躬が守山まで馬で送り、また守山宿では吉田等雲(薬師という職にあって祐碩・幽碩とも)の紹介で優遇され郡山まで馬で送られていることが、"廿九日"の項に"守山迄ハ乍単々馬ニテ被送、晝飯調テ被添。守山々善兵へ馬ニテ郡山迄送ル。"と記されている。五月に入って、尾花沢を離れる時"廿七日"の項に"清風々馬ニテ館岡迄被送ル。"とあり、更に六月に入って、"六月朔、大石田を立。一栄・川水・彌陀堂迄送ル。馬貳疋、舟形迄送ル。"とある。そして"十日"の項に"左吉ノ宅ヨリ翁計馬ニテ光堂迄釣雪送ル。"とあるのが、日記の記録では最後である。客人たる芭蕉主従を馬で送った人々、桃雪は館代、等躬は駅長、善兵衛は守山宿の間屋、清風は富商、一栄は大石田の船問屋(近藤呂丸(左吉)は山伏かという、少し趣を異にする。富有な御師などであれば同趣。)といった人々は、社会的地位とか富とかの背景があつて、始めてこのような接遇法が可能であつたのであり、それだけに曾良も印象深くて記録したのではなからうか。

黒羽から野間まで"此間貳里半餘。"、高久から松子村まで"此間壹里。"、守山から郡山まで"守山々郡山へ武

里餘。"、尾花沢から館岡まで"尾花沢ニリ元阪田一里"で三里、大石田から舟形まで"ニリ一里半舟形"で三里半という具合(左吉宅より光堂までは不明、長距離ではなさそうである。)で、馬で送られている距離は大約等しい。駅長と言われる等躬の場合のみが、須賀川から守山まで"壹里半計" + "十余丁" + "壹里半" + "貳里"と記録されていて五里以上、大分の長距離であるが、これは駅長という職掌のせいと特殊と解してもよいのかも知れない。とすれば、客人を馬で次の目的地に送るといふ接遇に対して、客人としてはその厚意に応待する一定の礼儀というものがあつたかと思われるぐらいに、一つの宿駅の間というぐらいの一定の距離で馬を返しているようである。

馬で送るといふ用法以外で、随行日記に見られる"馬"の例は、"馬次"とあるを除くと次のようである。

- ① 一 廿八日(五月)馬借テ天堂ニ趣。
- ② 六日(六月)天氣吉。登山三リ強清水ニリ平清水ニリ高ヒラシツ清、是迄馬足叶。
- ③ 十六日 吹浦ヲ立。番所ヲ過ルと雨降出ル。一リ女鹿、是々難所。馬足不通。
- ④ 廿七日 雨止。温海立。翁ハ馬ニヲ直ニ鼠ケ關被趣。
- ⑤ 三日(七月)快晴。新瀉を立。馬高ク、無用之由、源七指圖に而歩行ス。
- ⑥ 十三日 市振立。(略)入善ニ至テ馬ナシ。

①例は、立石寺の宿坊で一泊して天童に行くに馬を借りたというのであり、馬次なきところで馬を利用しようというので特別に依頼することあり、記録したのもあろう。②例は、羽黒三山参詣に際し、月山に登るに「難所成。」という所と取りかかるまでは馬で行くことが可能であったというのであるから、これも印象的に特殊な例である。③例も、難所で馬で行くこと不可能という特殊な例、④例は、芭蕉だけが別行動するところで、曾良にとって印象的なところであつたらう。⑤例は、馬賃が高いので馬を利用すべからずという源七の指導で歩いたというのであるから、これも特例である。⑥例は、黒部川の難所を越えるのに馬がなく、「人雇テ荷ヲ持セ、黒部川ヲ越。」とあるところ、これも⑤例と同じく特例である。こう見てくると、何か印象的で特別な出来事があつたところに「馬」が出てくるのであつて、馬で送られるという接遇を受けたと同趣と言えようである。これらの事實は、極く普通の馬次で馬を利用した時には、馬を特別に記していないことを示してないだらうか。「馬次」の語は、四月廿九日の条に「巷里計下リテ白小作田村ト云馬次有。ソレヲ式里下リ、守山宿ト云馬次有。」と記すように散見する。ここは等躬に送られたというところなので、馬を乗り替えたかも知れないが、ここで馬次の馬を利用したかどうか不分明、その他散見する例も宿駅たることを示す語であつて、馬を利用したかど

うか不分明であるが、十分利用した可能性はあると思われ。そこでも馬を利用したとは書いていないのであるから、馬を利用しても特に記録していないところも多いのではないかと推測は、十分成立可能としていいのではなからうか。「雲岩寺見物」とあるだけであるが、ここで馬を利用した可能性は十分あるだらう。

参禅親炙し、今や俳諧に遊ぶ身と成り果ても、十全に敬意を捧げて来ている仏頂和尚のかつて山居した寺というので、是非参詣したいと芭蕉は願っていた。浄坊寺家に招かれると、座談の間にその意向を伝えたであらう。その芭蕉の願いを聞いた浄坊寺桃雪は、弟鹿子畑翠桃とともに案内のことを議したはずである。早速に翌五日に、「見物」である。随行日記には、「見物」という表現は少い。神社仏閣に行っている時は、多く「詣」「拜」という語を用いており、時に「行」「遊」「寄」などの語が散見するのみ、やはり敬意を表した表現が多いわけである。「見物」とあるのは、あらあら見て①「廿九日(四月)快晴。(略)村雪哥仙絵・讚宗鑑云由、見物内、人丸・定家・業平・素性・躬恆五ふく、②「九日(五月)快晴。(略)茶ナド吞テ瑞岩寺詣、不残見物。」③「廿七日(六月)雨止。温海立。翁ハ馬ニテ直ニ鼠ヶ關被越。予ハ湯本へ立寄、見物シテ行。」などである。絵画の拝見を「見物」と表現している外は、遊山気分の見物の意のごとくである。瑞岩寺のところでも、

一応「詣」と表現した後で「不残見物」なのである。雲岩寺の「見物」もそのごとくで、その気分の反映が「おくのほそ道」の記述に見られるのであろう。しかし案内する桃雪にしてみれば、師でもある遠来の客を大切にもてなす心構えがあったはずである。城代家老としての体面もあることとして、馬の用意をした上、供も連れて案内するということになったであらう。雲岩寺へは先振れとも言うべき連絡をしたかも知れない、城代家老が客人をお連れして参詣すると。寺側もそれなりの準備をして、城代家老と客人の来訪を待ち受けていたのではなからうか、昼食ぐらい用意したかも知れないのである。いずれにせよ、相当の人数の道中になった可能性が多く、これも「おくのほそ道」の記述に反映しているよう。道々において、所の町人、百姓にも行き会ったであらう、城代家老に対するそれ相応の敬意を表したはずである、近時のテレビ時代劇では城代家老は悪人面の敵役が多いが、十七代も同じ場所では生活を続け得た浄坊寺氏であってみれば、それ相応の敬意と親愛の情が示されたのではないかと思われる。ともども芭蕉主従には快適な雲岩寺詣であったと思われる。もっとも、師の山居跡を訪れる芭蕉には、曾良の表現した「見物」とは異なった感覚での参詣であったらう。その感懐は、「おくのほそ道」の記述を吟味すればよいのである。

杖を曳くという表現、必ずしも歩く意を常に含むと考え

なくてもいいという考え方もあろう。ある目的地に「行く」という意の文飾表現であって、馬で行こうが、駕籠で行こうが、あるいは車や電車で行こうが、杖を曳くと表現することはできるといふ考え方である。それも不可能ではない、事實は馬で行ったのであるが、その時の行楽の気分を芭蕉が杖を曳くと表現したというのである。しかし、一般の読者はどうであらうか。諸注を「詳考奥の細道」に依って見るに、「〔綜合・樋口〕『禮記』檀弓上に、孔子蚤作、負^レ手曳^レ杖、消^ニ搖^{（逍遙）}於門、歌曰、云々。是等から漫歩^{そぞろあるま}乃至逍遙するに主としていふ。急用などで疾行するには言はぬやうである。』とあるのみ、歩くことを前提にしての注のようである。現代語訳を見ても、「出かける」という表現の訳が多くて今一つ不分明であるが、講談社文庫本では「足を伸ばす」と表現し、飯野哲二の精講のごときは、一応「訪ねること」と解しながら「道中も賑やかに二里余りの道もいつの間にか歩いて」とする、歩くことを前提として口語訳をしているのである。注解者にしてかくのごとくであるから、一般の読者がこの表現を歩く和解しても当然であらう。芭蕉は、そう受け取られることを充分予期していたのではなからうか。予期しながら、その語がこの雲岩寺参詣の空気をもっともよく反映している語と認定し、ここに用いたのではなかったか、とすれば、これもよく説かれる芭蕉の「おくのほそ道」における仮構表現の一つと

いうことになるのではなからうか。

七

武茂川沿いにある雲岩寺は、周囲を四・五百米の山々に囲まれた谷間いにある。門前の駐車場でマイクロボスを降り、武茂川にかかる橋（朱塗りの橋で瓜陵橋と言う。）を渡る。「神光不昧」とある扁額ある山門をくぐると、丁度大きな挿り鉢のような地形のところに、こうした辺地には珍らしい立派な建築群が並んでいる。山門を入れてすぐ開ける広い平地の左手の茂みの中に芭蕉句碑がある。仏頂和尚の和歌と芭蕉の句とが並刻されているもので、直人氏によると、氏が幼い頃には一段高い所に建っている本堂の側にあつたとのこと、前の住職があまり句碑などを重んじない人で、こうした低い所に移したと言われる、年とともに芭蕉の声名は高まるばかりと思ひ込んでいたが、禪を重んずる雲岩寺では芭蕉の位が下つたのであろう。正面には古い仏殿があり、小高い所の正面に方丈、左手に禅堂あつて階段を昇つたり降りたりで経廻る、豊かな木々が美しく剪定されている、これは大変な費用だと呟くと、全部坊さんがするんですよと直人氏、同じ禅宗の坊さんでも、豪勢な庫裏が建築中でも庭が何となく荒れ果てた感じの大雄寺に比して、お寺を維持する心掛けが違うのかなと思つたり

する。正面右手の少し小高いところにあるのが庫裏で、その上方の少し切り立つたような山の斜面、芭蕉の描写によれば突々とした岩山という感じだけれど、美しい木々が繁つていて岩肌がさほど目立たないその斜面に山居跡があるとか、今はあそこには入れませんし、行っても何もありませんと直人氏、「後の山によぢのぼることは諦めた次第である。久富哲雄氏の「奥の細道を歩く事典」によると、「臨川開祖仏頂禪師塔所」「仏頂禪師山居之跡」という石碑があるらしい。やはり入り口は閉鎖されていても記してある、山居跡は尊いところなのであろう。

この寺は、豊臣秀吉が攻めた時（小田原征伐の時、烏山八万石那須資晴一族が従わず、この山にこもつたという。）近郷の人たちが逃げ込んで焼き払われたという、昔の建物は大変なものであつたらしいが、その時全て焼亡したとか、山門のみが焼け残つたとかで古い建物だけれど、その他は新しいもので、直人氏の幼い頃に比しても色々様子が變つていふることであつた。殊に禅堂は最近の建物のようである、時の流れが寺の姿容を強いるのであろうが、鄙にはまれな美しく落ち着いたお寺である。しばしこの静寂に身をゆだねて、次に進む。次は遊行柳に行きますとのこと、マイクロボスに万事おまかせである。

芭蕉主従は、雲岩寺見物をすませてから黒羽周辺の神社仏閣を経廻つて殺生石を見に行き、そこから少し逆行の形

で遊行柳を見に行つて白河の関に行つてゐる。白河の関から黒羽まで逆行して線を引くと、少しいびつなZ型である。直人氏は、師の加藤楸邨氏のお説と説明されたが、けだし適評であろう。そのZ型、もしくは那須野名物という稲光り型の軌跡を見ていると、夷の地に入る前の芭蕉の心のたゆたいをさえ感じるのである。

このZ型の軌跡を忠実に辿ると、マイクロバスを利用して最低でも三日はかかるかと直人氏は言われる、私どもの予定は一日半でしかないのである、その間に芭蕉が寄つたところをできるだけだけ巡回しようというのであるから、直人氏も苦勞されるわけである。結局、第一日はZ型の外周部を大回りすることにされたらしく、まず遊行柳へとつたようである。

雲岩寺から逆行して前田の集落に出て、北に向つて走る、旧陸羽街道でもなく、地藏田・八津・五斗蒔などという集落をつなぐ山間の平地である。伊王野という少し大きな集落を過ぎると旧陸羽街道に出る、道幅にそれほど大きな差があるわけではないが、いくらか整備されている感じである。伊王野を過ぎて一里強走ると、芦野の里である。

公民館なども見られる芦野の集落を通り過ぎて、左手に入る小道を一、二度くるりくるりと曲つたら、遊行柳の見える田の中の小道に停車である。途中で橋を渡つたが、那珂川の支流である奈良川にかかる橋であつたようである。

圃条整理で田の様子が變つた、元は小さな田が様々な形で並んでいる中に、この遊行柳の茂みがあつたと直人氏、周田を岡というべき小山の連なりに囲まれた小広い田園地帯、その中に鏡山という岡があつて温泉神社がある。温泉をユゼンと呼ぶ、この地方には湯本の温泉神社の分社が沢山あるとのこと、その鏡山の麓の小さな社の前から一直線に線を引いたところ、百米あるかないかであるが、そこに石の小さな鳥居があつて遊行柳の茂みとなつてゐる。

又、清水ながるゝの柳は芦野の里にありて田の畔に残る。"と記した芭蕉は、西行の"道のべに清水ながるゝ"(新古今)の歌に引かれて来たのだが(此所の郡守戸部某の此柳みせばやなと折くゝにの給ひ聞え給ふ"とあつて、所の領主芦野民部の言によつて、謡曲「遊行柳」でも著名な柳が今も残ると知つて来訪したのもあつたが)、西行の歌によつて美しい水の流れる小川の辺りに立つ優美な柳の木を想つていて、必ずしもそうでなかつた感じを"田の畔に残る"と表現したのもあるう。今も、鏡山の麓をめぐつて小さな溝があり、それが遊行柳に向う畔とも言うべき小道に添つて続いているが、これは田に水を配する側溝とも言うべきもの、稔りの時節に向う九月上旬は、最早水は流れていない。水なき溝に刈り取つた草が投げ入れてある状態で、"清水ながるゝ"どころか、蕪村の"清水涸石処々"の風情もうかがえない。玉垣の中に遊行柳が樹つ

ている。そして芭蕉や蕪村の句碑と燈籠などもあって、あたりがきれいに掃除されているのは、所の人々の奉仕であるるか、この土は柳に適合しない土質なのか、一定の大ききになると枯れてしまふ、今の柳も私の幼い時のものは違ふと直人氏の説明である。

殺生石見物して芦野の里に逆行した芭蕉主従の道程は、随行日記に次のように記す。

一 廿日 朝霧降ル。辰中尅晴。下尅湯本ヲ立。ウルシ塚迄三リ余。半途ニ小や村有。ウルシ塚ヨリ芦野へ二リ余。湯本ヨリ総テ山道ニテ能不知シテ難通。

一 芦野ハヅレ白坂へ三リ八丁。芦野町ハヅレ、木戸ノ外、茶ヤ松本市兵衛前十町程過テ左ノ方ニ鏡山有左ノ方へ切レ、八幡ノ大門通り之内。左ノ方ニ遊行柳有、(略)

温本から漆塚までは街道ではなく那須岳の麓から降りながら高原を横切る形となる、山道と言うのではなさそうであるが、池田・北条・戸能という小集落を経て漆塚への道は、決して楽な道ではなさそうである。しかしそれ以上に漆塚から芦野までの二里あまりが難所と思える山道である、黒田原の町まではよいけれど、塩阿久津・大平を通過して芦野に抜ける道がそのようである。芭蕉主従が、そうした「難所」を通過してまで芦野に来たのには、(もつとも、殺生石から白河の関に行くには、必ずしも芦野に出る必要はないけれども、どこかで「難所」とされる道を陸羽街道を

横切る形で越えなければならなかったけれど)、清水ながるゝ柳かげを求めてであつたらうが、その予期するをいくらか裏切る景色であつたらう。田植時とて、田に引く水は流れていたであらうが。ただ、早乙女の田植姿は、芭蕉にそれなりの詩情を抱かせたのかと思うのである。「田一枚」という諸解ある発句が残されることとなった。芦野の町外れに建中寺という寺あり、芦野氏の菩提寺で、民部の墓もあるという、気付かずに素通りであつた。

八

芦野から旧陸羽街道を北上、板屋・高瀬・寄居本郷などいう集落を奈良川に沿って行くと、明神という栃木・福島の県境に出る。この道は芭蕉主従も通つた道、山間の細道であるが、旧陸羽街道であるから整備はされていたであらう。下野と陸奥の国境で、それぞれの地に並んで二つの神社がある。関明神という、白河領側の社が立派で下野側は見るかげもないのであるが、(今は境神社とある。)白河十五万石の方が小藩の芦野より金持ですから当然ですと直人氏の言。

昔日の宿駅芦野から関明神に至る道程を随行日記に見るに、

一 芦野ハ一里半余過テヨリ居村有。是ハハタ村へ行バ、

町ハヅレ右へ切ル也。

一 関明神、関東ノ方ニ一社、奥州ノ方ニ一社、間廿間計有。両方ノ門前ニ茶ヤ有。小坂也。これ右白坂へ十町程有。古関を尋て白坂ノ町ノ入口右へ切レテ篋宿へ行。廿日之晩泊ル。暮前右小雨降ル。

とある、その当時から二つの社があったごとくである。今、陸奥側の神社には、各所の大名の寄進になる燈籠あり、多く寛政以降の年号が見えるので、白河楽翁に対してお追従で奉獻されたかなど邪推してみることである。芭蕉の「風流の」の句碑や大江丸のそれも見られる、神社の建物の側に芭蕉が白河関周辺でどのように行動したかの詳細な図面が掲示されていて参考になる。日記には「小坂」とあるが、今や坂らしい坂ではなくなっている、改修工事で掘り下げたのであろう。茶屋らしきは勿論見当らない。

芭蕉たちが関明神から篋宿へ向った道は、国境から白河へ少し行った泉岡という集落から右手に折れる道でもあったろうか。人家はほとんど見受けない道であるが、今は林道として整備されていて、マイクロバスぐらいは楽に通れる。二ツ穴・金堀などという地名のところを通過して、篋宿の入口にあたる茂ヶ崎に出る。そこから篋宿の集落を通り過ぎて南下すると、関の森の茂みの中に白河神社が見える。鳥居の右側に松平楽翁の建てた「古関蹟」の碑があった、寛政十二年の年号が見られる。寛政の改革を強行して

幕政を建て直そうとした楽翁が、家斉の親政強化によって必ずしも意に染まない退隠をして文人的活動を始めた頃のことである。楽翁がこの地を関跡と顕賞し、近時（昭和三十四年）の発掘によって遺構が発見されて白河関跡であることが確定（国史跡「白河関跡」指定、昭和四十一年九月十二日）、少し整備されて公園的になっている。白河神社そのものは、全く観光化されていなくて荒れ果てた感じ、私どもが訪れた時も訪問者は相当あったのだから、観光化して整備すればと感じるほどであるが、神主が全く関心がないので直人氏の言、却ってその方が俗化しなくてよいのかも知れない。直人氏の説明によると、この神社は芭蕉時代以後に移築したもの、移築以前何処にあったかは当時のこととて判らないとのこと、とすれば芭蕉がここを訪れたかどうかは判らないわけである。

日記の本文は次のようである。

一 廿一日、霧雨降、辰上尅止。宿ヲ出ル。町右西ノ方ニ住吉玉嶋ヲ一所ニ祝奉宮有。古ノ関ノ明神故ニ二所ノ関ノ名有ノ由。宿ノ主申ニ依テ参詣。

明神の在り場所が町の「西ノ方」となっており、角川文庫本には「南」の誤りか。と記す。篋宿の集落の南の方に現在の白河神社は位置するので、この注は当然であるが、芭蕉時代の明神の在り場所は異なっていたかも知れないのである。もっとも定信の古関蹟にも、「篋宿村西有叢

祠」と見えるので、ここの「西ノ方」というのは日記の通りでいいのかも知れない、在疑とする。

芭蕉が参詣したのが何処かの探索は別にして、この関の森で白河の関の文を書いたとすれば、そこに見られる芭蕉の感慨はさもあらんかといふべき情趣ただよう場所である。古い杉（従二位の杉と呼ぶ。）もあり、やや荒廃した感じの風物もそれなりの情調ありである。白河の関の文については、かつて述べたことがある、今はそれを再録するを便とする。

○ 清爽の気に溢れていたはずの青葉若葉や目に染み入るばかりの卯の花や茨の花を眼前にした芭蕉は、古歌を縁にして想起される秋風・紅葉・初雪という伝統的に類型化された景色に等置することによって、「猶あはれ」也と陶醉境に入るのである。「猶」という語は、そう考えることによつて、初めて生きてくるのである。いづれにせよ、こうした芭蕉の目は、芭蕉の古きを慕う心情は、最早眼前の景を直視していないともいえるのではないであろうか。ここに、芭蕉の一つの姿を見いだすのである。（「文教国文学」第三号所収論文）

ところで、ここの「猶」の解釈の在り様は、必ずしも適切ならざるものが、今も見当るようである。ここに再説する理由は、そこにある、手近な通釈例を文庫本から掲げる。

文①（その古歌や故事のあれこれが第一に想起されて、）あの能

因のよんだ秋風の音を耳染にとどめ、また頼政の詠じた紅葉の景を思い浮べつつ、今眼前の青葉の梢を仰げば、また一段と感銘の深いものをおぼえる。（角川文庫本）

文②（今は初夏、青葉の梢はもろろん美しいが、）古人の歌った秋風の音を思いうかべ、紅葉の色を目に見る思いで、この青葉をながめると、ひとしお感興は深くなる。

（講談社文庫本）

文③能因法師がよんだ秋風を今も耳に響くように感じ、頼政の眺めた紅葉の散りしく情景を髣髴と思ひ浮かべながら、今までのあたり青葉の梢を仰いで見ると、これもやはり情趣深いものがある。（旺文社文庫本）

文①の口語訳は、（ ）内が説明に過ぎており、秋風と紅葉を並列して「つつ」という接続助詞で青葉を引き出しているところに歯切れの悪さを感じるが、「猶」を「一段」と解しているところは、文意をくみ取っていると見えよう。文②の口語訳は、（ ）内の本文にない補助的説明文が的確で、「猶」を「ひとしお」と解している点を含め、文意が正確に反映したものとなっていると言える。文③は、本文に極めて忠実な口訳のようでありながら、「これも」の指すのが青葉であつて、「猶」を「やはり」という語で解しているところに問題があるようである。文意を誤解し

た口語訳といえるであろう。

注釈書を代表して「詳考奥の細道」の「通釈」を見てみよう。

○（それを思へば、今は夏だが）能因法師が歌によんだ秋風が耳に響くやうに感じ、頼政がよんだ紅葉が目には浮かぶやうに思はれ、青葉に茂げる梢の様子もやはり趣深くながめられる。

（一）内の説明が文②に比して説明不足であり、青葉云々も芭蕉の視点の把握が不充分であるようである、「猶」を「やはり」と解することによって、青葉の趣きが深いと受け取られる通釈になっているからである。文③と同じくやはり「猶」を「やはり」と解することによる誤訳と言えらるのではなからうか。

このように、「猶」を「やはり」という語に置きかえているのは、直訳的であることの多い受験参考書類は全てそうであるし、一般の注釈書にも数多い。今は一、二摘記してみる。

○ その中でも、能因法師の「秋風ぞ吹く」の歌を思い出しては、はるばるこゝに來て聞いた秋風の吹くようすを想像し、源の頼政の「紅葉散りしく」の歌からは、都を青葉の時に出てこゝの紅葉に旅の思ひを深くした紅葉のさまを思いうかべて、私どもは今こゝの青葉の木末を眺める時に來たのであるが、今紅葉してはいない

青葉とても、こうしたつなかりを伴ってやはり深い趣が感じられる。（志田延義「奥の細道評釈」）

非常に丁寧に説明の付いた口語訳なのであるが、結局は「青葉」が「深い趣」あることになるのであって、芭蕉の視点は「青葉」に集中されることになってしまふのである。これも、「猶」を「やはり」に置きかえることから生ずる誤訳ということではないであろうか。今一例、次のごとしである。

○（かの能因法師の「秋風ぞ吹く白川の関」の歌を思うと、今も秋風の音が耳にきこえるようであり、（源頼政の「紅葉散りしく」の歌を思い出すと、その）紅葉のすがたが眼に浮かんで来て、（今仰ぎ見る）青葉の梢（の様子）も、やはり情趣ぶかい（思いがある。）（松尾靖秋「おくのほそ道全講」）

補なって訳した部分は（一）内に入れ、工夫した口訳なのであるが、「も」という格助詞を使うことによっていくらか焦点をぼかす工夫は従前の例のごとくでありながら、やはり青葉に芭蕉の視点が定まる訳になってしまっているのである。これも、「猶」を「やはり」と訳すせいなのであろうか。

ほとんどの通釈書がかくのごとくであるが、二、三の例外が管見の範囲において見受ける。

○ かの能因の秋風ぞ吹くとよんだ歌の趣を想ひ浮べ、ま

た頼政の紅葉散りしくと詠んだ趣を想ひ出して見ると、今のこの青葉の梢がなほ趣が深く感ぜられます。(岩

田九郎「奥の細道詳講」

右の例は、「猶」をそのまま現代語の「なお」にしているもの、この「なお」は猶一層という意のごとくに解され、文意を正確に把握した解釈のように思われる。

○(能因の歌によまれた)秋風を耳に聞く思いがし、(頼政がよんだ)紅葉(の頃)を眼前に思いやって、青葉の梢(の眺め)は一層情趣がふかい。(山崎喜好「全釈奥の細道」)

右の例は、「猶」を「一層」という語に置きかえることによって、「思いやって」という表現はいくらか弱いようにも思われるが、一層的確な口語訳となつていられるように思われるものである。

○能因法師がこの関を越える時に詠んだ「秋風ぞ吹く白川の関」の歌を思い、さながらその秋風を耳にきく様な思いをしつつ、又、源三位頼政が「紅葉散りしく白川の関」と詠んだ歌を思い、その紅葉を目の前に見る様な思いを抱きつつ見れば、現実に見ている青葉の梢も青葉の美しさだけではなく、よりいっそう深い情趣を感じさせるのである。(杉浦正一郎「おくのほそ道評釈」)

右の例は、補助的説明文を含めて、全く間然とするところなき口語訳と言えるもの、芭蕉の二重構造的とも言える

視座を正確に把握していると言えよう。ここでも、「猶」の語が「よりいっそう」と置きかえられている。「猶」の語を、いかに的確な口語に置きかえているかが、ここにおける芭蕉の心情を的確に把握しているかどうかの鍵のようでもある。

「なほ」の意はどう理解すべきか、まずは「増補雅言集」を見てみよう。

○「玉箒」に云、なほに三ツの差別あり一にはまだの意二には俗語やはりといふ意三にはいよくの意也 此うちはまだとやはりは相通ずる所もおほし又いよくの意に用る事は後世の事にて古き歌には見えず古歌にまだの意やはりの意によめるがふときてはいよくの意と思はるゝがおほき故に中比よりまぎれてそれらはいよくの意と見るから自歌にも其心によむ事出来たる也頼阿のころになりては其意によめるもいとおほし然れども又まだの意やはりの意なるもおほし しかるを近代の人はいよくの意を本義と心得るゆゑにまだの意の猶をもやはりの意の猶をもおほくは誤ていよくの意とせりよく古歌を見しらざればまぎれやすき事おほし

ここに説く三つの意あって、原義は一・二のごとくであるが、「後世の事」と説く三の意をもって、白河の文意を解すればよさそうである。近来の辞書を見ても、多く雅言

集覧に説くと同意のことを述べるに止まる、例として岩波の古語辞典の説明を見てみる。

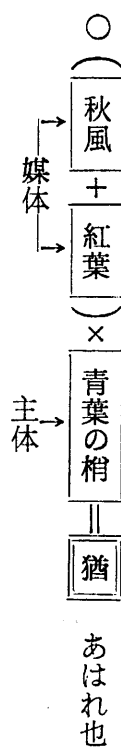
○「直・尚・猶」《ナオザリ（等閑）のナオに同じ。変

ったこともなく、物事が時間的に持続していくさまをいうのが原義。変りなく同一であるから、事も無い、平凡、また比較に使って、ちやうど同じの意。さらに時間の持続、延長の観念から発展して、加えて、その上、の意。

との説明あって、副詞の⑤の訳語として「さらに。もっと。一層。」の訳語が示されている。「やはり何ととっても」の訳語は②にあって、「猶」の語は、同じ事柄が持続していくことを原義として、その延長線上に「持続」の観念が強まることによって転義が生じ、そこに⑤のような訳語が生まれたようなのである。「猶」を「やはり」置きかえて訳しているのは、原義に近い意で解そうとしているのでもあろうか。「やはり」の語を検討してみると、古語としてのそれも、例せば岩波の古語辞典に、「やはり。そのままと云ふに用る詞也」△志不可起五▽という用例があるごとく、ある事柄が「依然として」続くことを指す副詞であり、「広辞苑」に「矢張」「副」もそのまま。前と同様なお。やっぱり。とあるごとくに、現代語としても同様のことが言えるようである。

これらのことを前提として、白河の章における文章を私

流に図式化してみる。



右の図式を説明すれば、古歌に詠まれた秋風と紅葉、その古歌も春から秋への時の経過をそれぞれが含むものであるが、それを媒体として目前の景である青葉の梢を主体として把え、「猶あはれ也」と芭蕉は感興するのである。その時、「猶」を「やはり」と訳すると、秋風と紅葉に当てられた芭蕉の視点がそのまま平行移動して青葉の梢に当てられ、それを「あはれ也」とすることとなる。媒体と主体との関係が立体的に結び付かず、極めて平面的な関係として読者に提示されることとなる。こうした関係での把握の仕方は、芭蕉の意図した表現の在り様とは異なるのではないかと思われる。私的図式化も死んでしまう。「猶」を「一層」とか「さらに」とかという訳し方とすると、媒体によって主体が浮き上ってくる、芭蕉の視点が深まる形で主体に焦点が定まってくるのである。ただこの場合に注意しなくてはならないのは、主体である「青葉の梢」に焦点が定まったと言っても、「青葉の梢」のみが「あはれ也」なのではなくて、「猶」の語あることによって、「青葉の梢」を通して「秋風」と「紅葉」を見ているのであり、その在り様を芭蕉は「あはれ也」と感興しているということ

である。結語は、先に引用した旧論に帰一する。

「おくのほそ道」における「猶」という語の使用例は、九例ばかりあるようである。次のごとし。

- ① 是を矢立の初として行道なをすゝまず。
- ② 猶憚多くて筆をさし置ぬ。
- ③ 山はおくあるけしきにて、谷道遙に松杉黒く苔したゞりて、卯月の天今猶寒し。

④ 〆白河〱

⑤ 猶夜の余波心すゝまず、馬かりて桑折の驛に出る。

⑥ 猶、松嶋・塩がまの所々畫に書て送る。

⑦ 行尊 僧正の哥の哀も爰に思ひ出て、猶まさりて覺ゆ。

⑧ 大聖持の域外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。

⑨ 「あすの夜もかくあるべきにや」といへば、「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と。

これらを「増補雅言集覽」の三類型①まだ②やはり③いよいよに分類してみると、①類型としては③⑤⑥⑧の四例、②類型としては①②⑨の三例、③類型としては④⑦の二例ということになるうか。②⑥の例などは、訳す場合いくらか言葉を補なう必要があるであろうが、まずはこの三類型のどこかに所属させて可なる例ばかりと言えよう。③類型のうち、白河の章以外の⑦例について見てみよう。

旧曆六月、羽黒三山に登った芭蕉は、月山に登って湯殿

山に向う途次、「鍛冶小屋」のあたりで「岩に腰かけてしばしやすらふほどに」、目前に「三尺ばかりなる桜」（エゾタカネザクラと呼ぶ花木である。）が「つぼみ半ばひらける」有様であるのを見る。その桜を見て、「ふり積雪の下に埋て春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。」と感銘し、「禅家の説く、炎天の梅花爰にかほるがごとし。」と想起し、更には行尊僧正の百人一首にも入集している、

○ 大峰にて思ひもかけず桜の花の咲きたりけるを見てよめる

もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし

（金葉集・雑）

という歌の「哀」をも「思ひ出て」、この桜の情趣が「猶」も「まさりて覺ゆ」なのである。行尊僧正の歌があることによつて、眼前の桜の美しさが尚更に増してくるというのであつて、芭蕉の目は眼前の桜の在り様を契機として、禅家の言や古歌を想起し、その世界に身をゆだねるのである。この「猶」については、諸注解ともに「増補雅言集覽」にいう「いよいよ」型の解を示して、異説はないようであるが、このように解される芭蕉の表現意図は、白河の章における同一類型のごとくに思われる。

芭蕉の紀行文を検するに、管見の範囲内で言えば、「笈の小文」の中に、

○ 一略—骨山と云は鷹を打處なり。南海のはてにて、

鷹のはじめて渡る所といへり。いらご鷹など歌にもよ
めりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし

鷹一つ見付てうれしいらご崎

という文がある。この「猶」も、西行の山家集に見える
「すたか渡るいらご崎をうたがひてなほきにかくる山帰
りかな」という古歌を想起することによって、「猶」「あは
れ」を感じて、一句生まれたのである。当然、これは「い
よいよ」型で解すべきもの、西行の古歌あつて一層に「あ
はれ」を感じたのであり、この一句も「鷹一つ」から古歌
の風情を想起し得て「うれし」と感応するのである。芭蕉
の目前の自然に対する視点の在り様が、極めて特徴的であ
ることが判るのであり、それを生かす言葉として「猶」が
あると言えるであろう。白河の章も、羽黒の章も、それ
に「笈の小文」のこの一文と重ねることによって、芭蕉の
「猶」の語の用い様の一法が鮮明に浮かびあがるのではな
からうか。

九

やはり、まだ「猶」の語にこだわり過ぎたようである。
やや荒廃した感ある白河神社の風物に堪能した私どもは、
マイクロボスで一路南湖公園に向う、白河市郊外にある古
い公園である。途中、直人氏は右手前方の小高い山を指し

て、関山があれですよと教えて下さる。芭蕉主従は「二所
ノ関」参詣の後で、この関山にある「成就山満願寺」に参
詣して白河市内に向っている。そして矢吹の宿で宿泊して
いるのであるが、私どもは通過である。

南湖公園は昼食のために寄るのである、芭蕉時代はなか
つた施設であるが、近代に出来たものではないのである。
園内にある説明板の由来を記しておく。

○ 南湖公園の由来

日本最初の公園である南湖公園は、享和元年白河領
主松平定信が、失業者救済、四民（士農工商）共楽、
灌漑用水、水泳、操舟の場とする目的で造った。

周囲に赤松、嵐山の楓、吉野桜を移植し、西の那須
連峰、東南の関山を借景として、山水の調和をはかり
最高の造園技術で築いた回遊式自然庭園である。南湖
の名は城の南に位置しているところから定信は、李太
白の「南湖秋水夜無煙」から名付けた。文化年間には
南湖十七景、十六勝を選定し、歌碑を建立した。

周囲には、茶室共楽亭、定信を祀る南湖神社があり、
境内には定信遺愛の茶室蘿月庵がある。湖面には浮葉
植物のジュンサイや水蓮が繁茂する。また周囲は禁猟
区であり、野鳥の楽園で冬には多くの鴨や白鳥が飛来
する。

大正十三年に国の史跡、名勝、昭和二十三年には県

立自然公園に指定された。

寛政の改革という政治的イベントの立役者であった松平定信が、老中致仕後、領内政治に専念するとともに、著述などの文人的活躍をしていることはよく知られたことであるが、公園造りという近代人的発想による先進的事業もあることは全く知らなかった。各藩の領主が造った名園と呼ばれるものは各地にあるのであるが、そして今ではそれらは一般に解放されて公園的になっているのが大半であるが、最初から公園として造られたものは近世時には珍らしく、今も入園料はいらないように、行楽の人ばかりではなく、近所の人たちも気楽に散策に来ておられ、普段着の子供たちが遊んでいる姿が沢山見られた。この地の人口密度の故為か、大勢の人が遊樂しているというのではなくて、ポツリポツリの人波ではあったが。

昼食を終ってから、殺生石のある那須岳に向うこととなる、冗にして漫なる今回の擬似行脚の報告は、既に予定の枚数をはるかに越えてしまったようである。殺生石および黒羽町内の文学遺跡遊覧については、また機会あれば報告するとして、ここで一応筆を擱く。

※ ※ ※

この度の擬似行脚については、私的に感懐なきにしもあらず、紙上を汚すを恥じながら一筆。

八年前か、敦賀から大垣まで、「おくのほそ道」の最終章の道筋

を探索しながら行脚した時、敗戦前後に罹患した結核性股関節炎の治療不全による後遺症で、左膝と左股および腰部がギックリ腰の激痛に襲われ（数年前からその徴候は各所に生じていたのであるが、ギックリ腰の治療法でだましましたしして瘦我慢しながら各地の行脚を続けていた）、同行の学生諸君に荷を持ってもらったり、夜は痛む足やら腰をマッサージしてもらったりという有様で、とにかく完歩はしたけれど、もうこれで街道行脚も「おくのほそ道」行脚も無理だと観念せざるを得ない状態に至っていた。

東海道の行脚から始まった研修旅行は、日光街道の行脚の時から「おくのほそ道」行脚に変貌し始めており、私自身も「おくのほそ道」の全行程を踏破してみたいと願うようになっていた。その願望を実現するためにも、当面する足腰の激痛を何とかしなくてはならなかった。対症療法をあれこれ試行錯誤的に繰り返しながら、数ヶ所の病院で検査を重ね、賛否両論ある中を、結局広大病院の生田博士（現在整形外科教室の教授である、当時はまだ講師であられた。）の指示に従って手術することを決意し、丁度その頃中村幸彦先生の古稀の寿を祝う会が城崎温泉で開催されたに参加させていた直後に入院、検査を重ねた後で手術した。手術が成功したならば、再び行脚に出かけられるかも知れないし、酒も充分に楽しめる（当時、時には痛みをこまかすために飲むということもなきにしもあらずであった。）と期待に満ちての施術であった。ところが、古い病巣が予想以上に変型しており（股関節の癒着部分が蜂の巣のようになっただけという表現を、執力の医師から聞いた）、当初せいぜい二百cc程度で十分と言われていた輸血が千二百ccを超えるということになったらしく、術後早々に非A非B型血清肝炎を併発する

に至った。

今回の施術は、整形外科的には大成功で、足腰の激痛はウソのように無くなってしまっていたが、血清肝炎の治療が始まって退院予定も大幅におくれるという結果になってしまった。退院後も、血清肝炎は初期治療が大切だということで、二年ばかりは慢性化した肝炎の治療に専念、勤務校を始めとして各方面に御迷惑をおかけすることになったばかりか、街道行脚など全く考えられない有様となっていました。三年目ぐらいからは、ポツポツ通常の生活にかえる努力を始め、現在では検査と治療を継続しているけれども、無理さえしなければ通常の生活が営めるまでに回復したようである。一病息災という気がまえの生活である、これも皆、私の我ままを許して下さった本学の上司、知友の深い理解と援助のおかげと深謝している次第。

最近、劇症肝炎の報道多く、B型肝炎の恐ろしさが喧伝されているが、私の場合は非A非B型とは言えビール型肝炎であることは同じ、社会の正しい理解と適正な治療をすれば、何とか社会復帰できることを強調しておきたい。劇症肝炎の報道以来、ビール型肝炎患者を白眼視する社会風潮があることを訴えられているので、殊更にこのことを付記する。

ともあれ、今回の日光から白河までの研修旅行は、行脚とは言えないもので、芭蕉主従に恥じ入るばかりであるが、とにかく数日の旅には耐え得るとの自信が生じたことからの思い立ちで、学生諸君には何かと迷惑をおかけしたけれど、私にとってはありがたい擬似行脚であった。本当の意味の「おくのほそ道」行脚は、もはや望蜀の感があるけれども、学生諸君が望んでくれるなら、これからもポ

ツポツと続けていきたいものである。

同行の学生諸嬢は次のごとし、上杉智子、小野里、栗原瑞恵、坂井峰子、滝山栄子、中尾佳代子、中尾千恵、中田朋見、成瀬純子、福本美鈴、三原弘子、三宅陽子、元安智代、山口知恵美、山本恭子。

注(1) 一般の注釈書には、「御山に詣拝す」という文章に、かくのごとき僻注あるは見ないが、考え方の立場は全く異にするけれど、山本僧著『奥の細道』を歩く』の中に、「権力の象徴に対する批判」との小見出しの文章の一部として「そもそも「なおはばかり多くて」といふ表現は、対象物を悪ざまにいたい気持ちを伏せるときに用いることが多い。「今此御光一天にかゝやき」と芭蕉がいう「御光」をおおかたの解説書は東照権現の威光と説明している。私もこれまでそう信じていた。ところが再三読み返すうちに、すぐ前にあげている、日光と改め給うた空海ととるのがもっとも妥当ではあるまいか、と考えるようになった。この「御光」を東照権現とする根拠は、「卯月朔日、御山に詣拝す」と書き始めた「御山」を、東照宮と解するからである。ところが芭蕉は、「むかし御山を二荒山と書いていたが、空海大師開基のときに日光と改めたまう」と述べている。だから芭蕉が詣拝した御山は、東照宮ではなく、「日光」そのものの自然だったのではないか。」というのを見出す。「御光」とか「猶憚多くて」の理解は、私の場合には全く逆になるのであるが、「御山」に対する解に一脈通ずるものがあるごとくである。ただ私の場合には、芭蕉を抵抗詩人などという妙な理解を示される山本氏とは全く別の立場からの理解の仕方であるので、

誤解なきように願いたいものである。

(2) 文法的な解釈に発言する資格はないのであるが、「んとす」の約言かとされる「んず」について（約言とするには異説が多いようであるが）、『国語助動詞の研究―体系と歴史―』此島正年著に、「むとす」の約として「むず」があったと「枕草子」一九五段にあるので一応従うべきとし、「疑問がある」とすれば、「むとす」から「むず」へという音韻変化よりも、意義的に「むとす」の転の「むず」がなぜ「む」と同意になりうるかということであろう。普通に「ず」の添加によって推量なし意志の意が強くなると言われるけれども、「ず」が「とす」に由来するならば、「……シヨウ」という純主観を、「……シヨウトスル」あるいは「シヨウト思フ」というふうに客観化することによってむしろ弱めることになりはしなかったかとも考えられるが、しかしこれは、「……トスル・ト思ウ」と客観的に確認することによって「む」の意が強められたとすれば、いちおう説明できるであろう。と説く。この「とす」の説明は、私説にいくらか共通するところがあるようで、我流の説も文法的にあまり見当外れの解釈でもなさそうである。もっとも、近世の語法について論じたものは見当たらない。これらは、多く小川輝夫教授の教示による。